

# 東アジアにおける相互認識の意味

——韓国読者へ、そして日本の友へ——

孫 歌

●●●●●

本稿は、韓国の「創作と批評」出版社から出版された筆者の論文集『アジアという思惟空間』の前書きである。出版社からの要請に応じて、私個人の思想遍歴を書いたつもりだが、思うに、個人のことより、中国の思想界が一九八〇年代以降に示してきた多彩な変化そのものを書くべきであつたろう。本稿では、私個人の経験を、ただ読者諸氏の中国認識へのアプローチのステップとして役立てていただければ、何よりありがたいことである。本稿はもともと韓国の読者に向けて書いたものだったが、韓国以外の読者も自ずと視野に入ってきていた。韓国でこの本が前書きを含めて出版されて以来、すでに一年余になるが、前書きに書いたことは、おそらく今日にもなお生きている。この一文を日本の読者にも捧げ、問題意識を共有することができれば、と思う所以である。

## 一

韓国の友人たちが私の書いたものを韓国語に翻訳して下さると聞き、大変光栄に思う。これをきっかけに私は韓国の読者と出会う機会を得たのである。翻訳のお世話をしていただいた韓国の友人は、私にこの文章を書くに当たって、本書の内容についてではなく、私自身について語ってほしいと言ってきた。思うに、それは私の個人的経験に何か価値があるというよりも、中国と韓国の知識人が互いの文化的背景や行動原理について、(おそらく知識はそれなりに持つようになったものの) 感覚的にはまだなじみの無い現状

において、率直に自己を語ることで互いの距離を縮められるかもしれないことだろう。

一九九五年、私は初めて韓国を訪問し、釜山で開かれたシンポジウムに参加した。私にとって、この韓国訪問は忘れがたく、重要なものとなった。私は大きな衝撃を受け、皮膚感覚のレベルで「東アジア」についての経験を求め始めた。

私は大学の中国文学科を卒業したのだが、後に述べる縁から正統的「文学研究」から逸れて、日本思想史にかかわる研究を行ってきた。十数年来、私はずっと中国と日本との間の問題を論じ続け、韓国の問題については、立ち入る機会もその能力も全くなかった。実際、初めての韓国行きさえ日本の友人に勧められてのものであり、その上、日本人研究者や韓国留学生数名とともに日本から釜山に向かったのである。

まさに韓国へのこの入り方のせいだったかもしれないが、私は「純粋な中国人」が気づきにくい事実に気づいた。それは、韓国と日本との「対立」あるいは「対話」には、「中韓」や「中日」の同様の状況ではむずかしい、真の接触があるということだ。韓国人と日本人は、どうやらいかに鋒を交え、いかに対話の経路を見つけるかをよく心得ているようだ。対立するにしろ、敵視するにしろ、あるいは友好的に付き合うにしろ、双方にはあるべき「呼応」がある。

一方、中国人は韓国や日本に対して、相手方に分け入って行く有効な経路を見つけられず、このために感覚的な呼応を欠く嫌いがある。おそらくこのような状況のために、中国の知識人と韓国の知識界との対話においては、西洋の媒介——例えば西洋のモダニティ理論や批判理論——に依存しがちになり、直接対話は難しくなる。いかに誠意があるうと、私たちは互いに何の媒介もなしに相手の問題や苦悩にアプローチすることが困難なのだ。

初めての韓国訪問からはすでに七年もの歳月が過ぎた。状況は大きく変わり、韓国の状況が中国知識界の視野にも従来とは比べものにならない比重で入るようになり、対話も深化している。しかし、だからといってあの最初の困惑が解消したわけではなく、逆により見えにくい形で私たちの「交流」に影響を与えているのを、今もうつすらと感じる。中国の知識人にとって、「韓国の論理」はなじみが薄く、分かりにくいものであり、「英語の論理」に「翻訳」し、さらに人びとが一定程度以上共有している理論分析で補うことで、何とか理解可能、中に分け入ることが可能なものとなる。一方、韓国の知識界にとっては、中国知識人の視野における「アジア意識」の欠落は、ある程度まで中華帝国の自己中心主義の現代版だと解されがちである。

中国知識人にはアジア意識が欠けていると韓国の友人が批判するのは当たっていると私は思う。「アジア」言説が次

第に流行しつつある昨今の状況にあっても、中国の知識界にはアジア意識が依然として欠けている。私たちもアジアを議論してはいるものの、それは必ずしもアジア意識の存在を証明するものではない。それはちょうど西洋の理論資源を用いているからと言って、必ずしも西洋中心主義を鼓吹しているわけではないのと同じだ。私がこの知的状況に注目せざるを得ないのは、東北アジア地域に一定程度共通する知のあり方のためである。東西が相互にぶつかり合い融合する枠組みの中で、自らの歴史過程を議論せざるを得ないとき、我々はいわゆる「純粋な本土」や「他者と区別された自己」などという分類に拠って主体性を確立することとははや不可能だ。しかしそれと同時に、私たちの母語文化が単純には通分できない特質を持つていることも否定できない。単に文化相対主義と自文化中心主義、あるいは国際主義と民族主義などという対立概念を用いるだけでは、このような複雑な状況に有効にアプローチすることはできない。また単に問題をグローバル化の文脈のなかに置いて論じるだけでは、やはり状況の中の最も複雑な要素を捨象せざるを得なくなる。これらのことは、問題から逃避することを潔しとしない人であれば、誰もが認めざるを得ない。

このような大前提を議論しないことには、私たちはより複雑な精神領域において、根本的な問題に向き合うことができない。「なぜ我々はアジアを論じなければならないのか」

この命題と、この地域に生まれた私たち知識人との間の関係はいかなるものなのか。

経済のグローバル化と東アジア社会の急速な勃興、アジア金融危機によって形成された東アジアと東南アジアなど諸地域との緊密な関係、これらによって確かに「アジア」はもはや単に西洋に対して受動的な存在ではなくなった。もともと西洋世界によって創り出されたこの客体は自己へと回帰し、自己の主体を確立し始めた。しかも、この過程がいったん始まると、国民国家を基盤とした従来の「西洋との対抗」モデルは明確な輪郭を失ってしまう。同じように自国領土に米軍基地の存在を容認せざるを得ない韓国と日本の間では、「アジア」問題に言及しない限りは、国民国家を前提とした各々の対米抵抗の発想が有効であるかに見えるが、アジア、特に東アジアの叙述が前提となると、日韓の矛盾もそこに交じり合ってしまう。歴史的な恩讐の記憶がもたらす痛みは、米国占領下という現在の傷口がもたらすそれに劣らない。このような「東アジアの内部矛盾」の顕在化によって、我々は国際政治関係の叙述を新たに組み立て直さざるを得なくなる。なぜなら、それはもう単なる「西洋の覇権の東洋への侵入」問題ではない。日本の「大東亜共栄圏」イデオロギーが覆い隠してきたアジア諸国侵略の事実、「東西対抗」モデルを用いるのみでは歴史上の緊張関係を説明できないことを証明している。

日本の歴史において「アジアを代表して西洋に対抗する」というスローガンが組織したものは、アジアの一体化どころか、隣国に対する残酷な侵略と剥奪であった。このことは厄介な問題を東アジアの知識人に突きつける。西洋への対抗姿勢は必ずしも自らが覇権論理に陥らないことを保障してはくれない。それどころか、戦後の冷戦構造の中で分裂状態に置かれた東アジアは、米国という西洋覇権の象徴を「内在化」してしまった。アジア（東アジア）が西洋に対抗するという構図は論理的には成立しても、現実と歴史との関係においては、政治・社会生活上のリアリティを保持できない。では、真の状況はというと、複雑な覇権関係は「内部」と「外部」との相互作用を通して、アジア内部の覇権関係を西洋（特に米国）の東洋に対する覇権関係としつかりと絡み合わせている。このような状況の下では、国民国家の枠組みが依然として有効であっても、あるいは地政学の視点が新たな視野を切り開いたと言っても、複雑な国際政治関係情勢を前にして、我々はやはり一つの固定した枠組みや視点に依拠してあらゆる問題を解釈することは不可能なのである。なぜなら、これら比較的有效な枠組みや視点にしても激変の過程にあるからである。

以上のような認識に基づいて、自分の限られた知識や思考範囲の中ではあるが、私は一貫して東アジア、特に日中間の「アジアの内部問題」を処理しようと試みてきた。私

にはアジアや東アジアについて何がしかの原理を見つけ出せるような力はないにしても、このような模索の中で私は東洋と西洋とのあいだの真の相互作用の過程に導かれただけでなく、状況の流動性に向き合うことをも迫られるようになった。そして私は、アジアに向きあうかどうか、アジアを課題にするかどうかなどは問題の核心ではないのだ、問題の核心は、このような思考を通して自分がどのような問題群に身を置くことになるのか、言い換えれば、アジアと向き合う、東アジアと向き合うとき、自分は流動する状況に真に向き合っているのかどうかなのだ、ということに自覚し始めたのである。

## 二

一九七八年の春、私が吉林大学の門をくぐり勉学を始めたのは、ちょうど中国に歴史的な転換が起こっている時期であった。文化大革命後、初めて学科試験によって大学に進学した文系学生として、私たちとその後数年次の学生たちは、知識上、精神上的「断絶」に直面した。我々の先生たちは災厄から抜け出したばかりの知識人であり、多くが文化大革命中に批判を受けて、心に傷口や陰影を抱えていた。このため教学において彼らは学生に妥協的態度を取りがちであった。教材も教え方も文革前や文革中からのもの

を引きずっていたが、それで厳密な輪郭を描き出せるようなものではなかった。まさにこの時期に中国の文学芸術界は生き生きとした創作を生み出し始めた。図書館では大量の外国文学の名著が「凍結」を解除された。一部の書物は依然として貸し出し禁止であったり、おおっぴらに読んだり議論したりすることが困難であったが、教室の外にはますます多くの情報が溢れるようになっていた。

あのころ、特に中国の東北部では、ほとんど全く「流行」という意識はなく、絶対多数の情報は、「過去」を向いていた。このことは、当時の東北地区には古典を学ぶ好条件があったということの意味している。母校の文系の各学部は優秀な教授陣を擁しており、一部の方々は当時まだ第一線で教学に当たっていた。しかし、受講は今日のように自由ではなく、別学科の受講は禁じられていた。例えば、当時哲学科の名教授がロックを講じることがあり、私は彼の講義を聴こうと自分の中文科の講義をサボって、哲学科の教室に忍び込んだのだが、不幸にも二回受講しただけで哲学科の職員に追い出されてしまった。とはいえ、あのころのキャンパスには今日の若い学生たちが感じることでできない自由があった。というのも、歴史にあいた一種の隙間のような時代にあつて、先行世代のトラウマと急激な社会の転換によって形成された知識の断絶状態のために、私たちは表面的には多くの人為的干渉のもとにあつたものの、そ

こには「学術」として私たちの感覚体系に入り込んでくるようないかなる規範もなかった。なぜなら、制度は權威を創り出すことはできても、思考の障害を作り出すことはできないからである。真の障害は優勢なものに迎合しようとする自己の本能から来るものだからである。このため、あのような環境の中で却って、輪郭がぼやけてはいるが真に存在するものとして、自由な思考空間が現出したのだ。私は随分後になってようやくこのことに気づいた。おそらくこのような自由のお陰であろう、当時、私の同窓からは数人の才能溢れる詩人たちが出現し、後に中国の詩壇で一世を風靡した。これらの才子才女たちは詩歌サークルを結成し、しばしば唱和的な創作活動を行っていた。ずっと作家になることを夢見ていた私も何篇かをものして仲間に加わろうとしたが、ほどなく才能に欠けることを丁寧に告知されることとなった。例えば、大学時代で一番の痛手と言えば、おそらくあの友人たちから受けた拒絶であろう。

私にとって一九八〇年代は学業を終え学術機関に足を踏み入れた最初の時期に当たる。中国において「科学的生産力」の統合が従来の政治イデオロギーに取って代わるのに伴い、この時期を中国の知識界は「新时期」と呼び、新啓蒙時代と見なすようになった。私にとっても当然視野を広げる時期となったが、私はそれに属してはいなかった。同輩の友人たちは当時の学界に勇名を馳せ、ほとんど当時の

學風を決定づけるほどの勢いであつたし、私が身を置いていた中国文學研究の領域は、おそらく當時「人の主体性」が関心の的となつてゐたために、輝かしい役割を演じていた。

しかしまさにこの時期に、私は知らぬ間に中国文學研究から離れ、かといつて當時真つ盛りであつた西洋の哲學や思想理論の學習ブームにも乗らなかつた。どうしてそうなつたのか、それは今となつてはどうでもよいことだ。というのも私は意識的にこのような選択をしたわけではなかつたから。もし人にとつて自分が身を置く場や知的雰囲気と同調しないことが可能であるならば、私はまさにそれを経験したのである。今思い返してみると、これはたぶん若いころ東北で学んだことと關係があるだろう。東北は「時代潮流」というような精神風土を欠いてゐるために、却つて逆に流行を追いかけてたり創り出したりする寵兒を生むこともあれば、時代精神と距離を保つ「反時代派」をも生み出すのである。私はどうも後者に属するらしい。私は当時べつに時流に乗ることを拒んだわけではなく、ただそのような本能がなかつたに過ぎないが、この距離感はずかに私に知的環境への一種の反省能力を獲得させてくれた。仮にこのような偶然的個人的経験が私個人に留まる性質のものでないとするなら、つまり「時代精神」と距離があるという状況を歴史と社会のもう一方の側面と見なしてよいのであれば、

このような側面を歴史と社会に分け入つて行くもう一つの思考経路と見なすことが可能ではないだろうか。その後の研究生活の中で、私は無意識のうちに自身のこのような「距離感」を思考と著述の視点に転化し、「時代精神」を追いかける思考様式を脱却して時代と歴史とを考察するようになった。それは今ではすっかり私の學問上の習性となつてゐる。

私は思いがけなくも日本にやつて来て、思いがけなくも日本の思想史研究に惹きつけられた。九〇年代に入ると、中国の學界は一連の論争の中で自己の自覺を持ち始めるようになり、社会科学の規範化の議論が巻き起こつた。九〇年代、中国の學界が學術形式の嚴密さと規範の重要性をますます重視するようになった時に、私は全く規範を逸脱した形で「思想史研究」を始めた。中国の思想史であれ、日本の思想史であれ、このような逸脱した研究に残された空間はないはずだ。しかし、奇妙なことに私は今日までこうしてやつて來たのだ。

しかし、私は決して孤軍奮闘してきたわけではない。私は今でも二人の中国と日本の先輩研究者に非常に感謝してゐる。彼らこそが私のこの逸脱の出発点を決定づけたのである。八〇年代末、私がまだもっぱら国外の中国文學研究を翻訳紹介する出版物を編集してゐた時、當時の直屬の上司であつた雑誌の編集主幹が私を強引に日本に「押し出し

た」。彼女は私が日本へ研修に行く手はずを自ら整えてくれ、「外を見てきなさい」と命令した。この日本行きは、私にとつて初めてであり、しかもしぶしぶながらであった。もし彼女のこの決定がなければ、私は一生日本と関係を持つことはなかったかもしれない。それから数年後、日本のある夏衍研究者が無名の若輩者である私に客員研究の機会を与えてくれた。その老紳士は私に「私の研究室に名義を置いて、あなたには別に何の義務もありません。何処へでも行きたいところへ行き、したいことをしていいのです」と言ってくださった。

私が尊敬するこのお二方は今ではともに退職なさっている。彼らは私の研究に対して直接的な指導を与えてくれたわけではないし、今でも最小限度のお付き合いを続けているに過ぎない。しかし、私のお二人への感謝の念はその後のいかなる良師良友にも勝るものがある。なぜなら、お二人は私が最も助けを必要としていた時に異例のやり方で私を助けてくれたからである。そこには「専門領域」や「地位」を考慮した様子が少しもない。彼らはただ、さほど機会を必要としない著名人に機会を与えるとか、専門領域の評価基準に即して後進に要求するよりも、若い者に存分に成長する機会を与えた方がよいと考えただけなのだろう。

この得難いチャンスをきっかけに、私は中国文学研究を

離れた。あるいはこうも言えるかもしれない。これを契機に私は中国文学研究を「押し広げ」、他の専門領域と交錯させることを試みるようになった。その結果、私はそれらの領域が自足状態のもとでは出会わないかもしれない問題にめぐり合った。何年も後になって、私はようやく、いわゆる学際研究とは実のところ非常に困難なものであること、それには各専門分野内部の研究状況を深く把握していることが前提として必要であり、単純な否定によって各分野の上に超然として座を占めることではないということを悟るようになった。実のところ、学際研究が打破しようとするのは、単に専門分野の閉鎖性だけではなく、それらの知的水準の低下状況でもあるのだ。おそらく今日、アカデリズムがいわゆる「学際研究」を体制に取り込んで、似て非なる「学際研究」方式を肯定しているという事実こそ、アカデミズムにおける評価システムと知の蓄積方式の貧困とをさらけ出しているとも言えるだろう。

私にこのことを認識させてくれたのは、もう一群の支援者たちであった。彼らは私より若い友人たちである。上述のお二人なくして私が日本と関係を持つことはなかったであろうが、またこれらの若い友人たちの応援と期待がなかったならば、私はこうして「育成」されることはなかっただろう。これらの友人たちの多くは専業あるいは兼業の雑誌編集者であった。彼らは常に自身の編集方針を刷新し続け、

常に私に原稿と意見を求め続けてくれた。彼らとの相互作用の中で最も感銘を受けたのは『學術思想評論』<sup>①</sup>の編集主幹である。全く資金的裏づけのない状況下で、この若者はたった一人の力で民間學術雑誌を企画・編集してきた。

これは「同人」誌ではなく、その執筆陣は広く外に開かれている。同時に、九〇年代を通じて中国の学界が「思想」と「學術」とを別々に論じがちであった中で、この學術誌は奇跡的にも學術と思想の眞の關係を示したのである。私の大部分の學術論文はここに發表したものである。編集主幹は絶えず私の考えに疑問や提案を投げかけ、私を叱咤激励してくれた。私が自分はある意味で若い人たちに育てられたのだと確信するのはこの経験からである。

九〇年代を通じて、中国の知識界は分化と轉換の中で簡単に統合不能な構造を形成した。これは何度かの有形の論争では概括できないものだ。もし論争が「時代精神」の象徴と見なされるなら、私はあえてその外に時代の活力を捜し求めたい。たとえそれがいまだ固定の形を成さないものであっても。もしかすると、時代の活力の一つが、アカデミズムの外に誕生した多くの「民間出版物」だったかもしれない。これらの出版物は体制内出版物のような物質的基盤を欠いているが、往々にして編集者の思考の深さと探求精神によって体制内出版物には得られない質の高い読者層を獲得している。そして、この読者層が探求と議論を渴

望する執筆者たちを惹きつけるのである。もちろん出版物の質を測るのにアカデミズムの中にあるかどうかは絶対的な基準ではない。なぜなら出版物の質を左右するのは編集者の質であって、知的制度との關係ではないからである。

ある意味で、この十数年来、中国にどっと出現した各種の民間出版物の質はさまざまであり、体制内出版物との対立を特徴としているわけでもない。一部の優秀な出版物はまさに体制内の資源を利用して生存している。正確に言えば、九〇年代以来の出版状況はアカデミズムの規範化の進展の必然的産物である。學術の規範化の過程が専門領域の体系化を促進すると同時に、狹隘化、硬直化もたらし、ひいてはエセ學問、エセ知識が正当性を獲得するような事態にいたったとき、必然的に一部の生命力に溢れた思考や探求が「専門領域規範」なるものからはみ出し、自らの生存空間を見つけ出そうとしたのである。この十数年は中国學術の轉換期における貴重な間隙であったと言うべきだろう。なぜなら、それはアカデミズムの周縁部にいまだ形を成さない多くの思考を生み出したのだから。

この黄金時代に立ち会えたことを、私は非常に幸運に思う。「博士」や「教授」の肩書きがしだいに學術評価の尺度となっていく時勢に、中国には依然としてこれらの權威に拘束されない思考のエネルギがあり、依然として學問の眞の意味を探求しようとする人々、特に自らの編集と著述



を通して生き生きとした思考空間を創り出そうとしている人々が存在している。彼らは常に学術と社会および学術自体の基本状況を思索し続けており、とても答えを見つけれそうもない難題に常に向き合っている。私の「潮流意識」を欠く研究姿勢は、これらの人びとの中に共鳴するものを見出した。彼らはちょうど『学術思想評論』の編集主幹と同じように、表面的な「思想」の桂冠を頂いてはいないが、真の思想テーマを直視しているのである。

### 三

学問の世界に入ってから、個人的能力の限界から、私はいかなる「思想潮流」にも関わって来なかったし、それどころか確固とした専門分野の基盤を持つていない。このため私にはこれらの意味での代表性は全く備わっていないし、専門領域を基盤に自己の研究の位置を定めることもできない。それだけでなく、研究対象が日本の現代思想上の事件や人物であるために、自己の研究の位置を定めるためのもう一つ別の難題にも直面しなければならなかった。それは私自身と母語文化とをどのように繋ぐのかという問題である。このような個人的経験から、私は中国文化へのアイデンティティを再構築するという、非常に特別な感覚過程を経験することになった。

私はかつて一緒に仕事をしていた友人と、研究者は自己の研究対象に入って行くべきなのかどうか議論したことがある。もし、それが可能であり、そうすべきでもあるなら、それはどのような過程なのか。ここ数年、私はずっとそのようにやってきた。つまり、私は自分の感受性によつて慎重に、自分が取り組んでいる日本思想史の基本問題にアプローチし、私の研究対象が歴史の中でどのように考えどう感じたのかを想像してきた。こうすることで私はある程度日本思想の歴史に分け入って行くことができたが、そうしたからといって私が「日本化」したわけではない。なぜなら、私は直観的な意味で自分の「感覚」に頼ったり、直観的な意味で研究対象に同一化するのを極力避けてきたからである。中国文学科出身の人間は直観に頼る過ちを犯しやすく、見たこと感じたことをそのまま真実の世界と思い込み、自分の主張が直接社会に影響を及ぼしうると思ひ込み、さらには当然のようにあらゆる現象から抽象的な結論を導き出そうとして、直観から抽象へと何の根拠も無い飛躍を気にも掛けない。私は中国文学科出身者として、自分のこのような「専門の弱点」を克服する必要がある、知的側面から研究対象に分け入ると同時に、自分をその中から掘り上げる能力を保とうとした。しかし、このような分け入り方がもたらした収穫は意外なものであった。それは私とももって持っていた文化的アイデンティティの直観性を破壊

してしまったのである。

外国研究において最も犯しやすい過ちは、対象文化の論理に分け入ろうとする努力が失敗した後に、自己の母語文化に逃げ込むことである。このような状況においては、母語文化は容易に絶対化され、分析不能の前提となってしまう。自国問題を研究する研究者に比べて、外国研究に従事する者がより過激でより単純な民族主義的傾向を見せがちなのは、たぶんここに原因があるのだろう。日本思想史の素材を扱い始めたころ、私も同様にこのような危険に直面した。しかし、一連の問題を議論する過程で、この危険は実は前者の危険と表裏をなすものであることに私は気づいた。思考方法が直観的であればあるほど、母語文化に対する自己同一化の盲目性の度合いもまた高くなるのである。

しかし、このような直観的で盲目的な文化アイデンティティからは有効な社会的、知的立場は全く期待できない。特に複雑な国際政治関係においては、このような盲目性は現実問題を取り扱う際の大きな障害となる。

このような二重の危険性に直面しながら、私は日本の現代精神史に分け入ろうとしてきた。そこで、私は自身の感情の直観性をコントロールして、それを思考の原動力に転化する術を学ばざるを得なかった。まさにこのような過程を通して、私は自己の文化アイデンティティを鍛錬し直した。知識をなりわいとする中国人として、自分が身を置く

環境を代表できず、また「時代精神」も代表できない思索者として、私は母語文化が私に与えてくれた全てを再点検することを学び始めた。このことによって、私は東アジアの隣国の人びとに近距離で接する際に、微細な点で言語では表現できないものを感じるようになり、沈黙の中にさまざまなメッセージを感じることができるようになった。

さらに、まさにこのような母語文化の再点検によって、私自身が実際には生まれつき母語文化に属していたのではなく、そこに入っていくには努力の過程が必要なのだということに気づかされた。こうして、私は知的生活におけるある単純な真理を悟り始めた。もし自文化に真に分け入ろうと望むなら、まず他者の文化に分け入ってみることだ、と。ちようど外国語能力が往々にして母語能力に左右されるのと同じように、もしある他の文化に有効に分け入って行けないなら、それはふつう、自己の母語文化に対して感性を欠いているということの意味するだろう。

私はますます研究対象に没入していくと同時に、ますます強烈にあるパラドキシカルな問題を感じるようになった。研究対象に分け入るというのは、「感情移入」式のやり方で対象と同一化することを意味するのではなく、自身をも「状況性」に富んだ存在に変えるということの意味する。つまり、流動し変化する過程の中で自覚的に自己の主体的性格を形成し、それを弾力性に富んだものにしなければならな

い。この弾力性によって、知的側面において国別の意識が解消され、注意力はより具体的な問題に注がれ、具体的な問題の中で解釈の可能性を探るようになる。この過程においては、私は単純に国別の枠を持ち出して厄介な「外国問題」を拒絶することはできなくなる。一方、ちょうどこのような「他者」の問題に分け入ろうとする願望の故に自分が中国人であることを忘れたとき、私は却って以前より母語文化に近づいた。なぜなら自身が無条件に自分の母語文化を代表するわけではないと気づいたお陰で、私は他者に分け入ろうとするのと同じ努力でもって自己の母語文化に分け入り、自己とこの文化との結節点を探すようになったからである。主体形成の過程はこのような「分け入る」努力によってはじめて真実のものとなるのであり、知的レベルにおいて、私は個人の文化アイデンティティの非直観的性格を理解するようになった。

おそらくこのような基本的な知的立場に立っていたためであろうか、わずかな個人的経験をきっかけに、私は東アジア三国のあいだの国際関係の不均衡状態に注目するようになった。ちょうどこの文章の始めに触れたように、三国と三国の人びとが互いに接触する際の形式とその効果は異なっている。国家レベルであれ、民間レベルであれ、あるいは個人的交際のレベルにおいてさえ、この不均衡は明らかである。中国人と韓国人の間のわだかまりは互いが置か

れた文化的な位相のズレに根ざしており、知識を用いてこれを繕うことは難しい。地理的な意味での大国と小国という違いは当然このような不均衡状態を作り出す基本要因だが、問題を単にこのレベルで考えているだけでは、問題を説明することは到底できない。接触上の障害や互いへの無関心等々の問題が全て一定程度の解決を見た後によりやく、「東アジア」という視点は、大国と小国との内的メカニズムの違いをよりいっそう明らかにすることができるようになるのではないだろうか。このようなメカニズム上の違いを単に国家の枠を使って明らかにするのはなく、このような国家の枠を打破して、一種の「内外相互作用」のレベルで明らかにすることが可能になるのではないか。

「思潮」を用いて一つの時代を解釈したり、「国家」や「文化」を単位にある行為や現象を解釈したりすることは、私たちには馴染みのある思考様式である。しかし、もしこれらの解釈の内部に深く分け入り、不確定な要素を捜し出してみれば、現実の複雑性が姿を現すだろう。「韓国」に対して「中国」を統合された一つの実体として見るならば、問題は比較的容易に把握できそうに見える。しかし、一旦流動状況そのものに分け入るならば、単純にあらゆる状況を国民国家の枠で捉えることはできなくなる。逆に、「内部」と「外部」の結びつきと相互作用は、現実においては国家という枠組みの統合機能に勝るとも劣らない。文化的アイ

デンティティの真実性はこのような不確定な状況の中で発生しているものであり、真の意味での主体性もこのような不確定な状況の中で形成されるのである。

九・一二事件が世界の構造を歴史的に変えて以来、国民国家の存在形態とその実際的な機能がまさに思考の対象となっている。最も重要で最も困難なことは、おそらく国民国家の実際の機能を前提や結論ではなく一つの視点として、いかに状況に関する議論の中に融け込ませるかという点にあるだろう。このような状況の下では、国別の議論の有効性は限られたものとなり、私たちは他者の政治・文化・生活の中にずっと深く分け入り、あの「相互作用」の可能性を持った問題を捜し求めざるを得なくなるだろう。このような議論の中でこそ、「アジア」あるいは「東アジア」は意味を持ち、私たちは真の状況に向き合うことができるようになるだろう。

## 訳注

- 〔1〕『學術思想評論』は賀照田を編集主幹（主編）として、一九九七年に遼寧大学出版社から第一輯が刊行された。孫歌氏は同雑誌に「歴史に入る瞬間を捉える」第二輯、「文学の位置——丸山真男のディレンマ」第三輯、「文学の位置——竹内好のパラドックス」第四輯等、一連の日本現代思想にかかわる論考を発表している。なお、編集者賀照田が

改革開放期の「時代思潮」について論じたものに、鈴木将久訳「困惑と不安の中の模索——雑誌編集者から見た中国知識界の現在」『現代思想』二〇〇一年三月号がある。

（邦訳 田宮昌子、訳注 砂山幸雄）